

## 人の温かみを感じられる学校 みんなで笑顔と元気を作り出せる学校



「一月は行く、二月は逃げる、三月は去る」とよく言われますが、本当に月日が過ぎるのが早すぎて、びっくりしています。年齢を重ねれば重ねるほど早く感じると言いますので、なるほど年月を過ぎる感覚が早く感じているのはこのせいかもしれません。

1月1日には能登半島の方で大地震が起き、まだ見つからない方がいることや、家が壊れてしまったり、食糧や水さえも思うように調達できないことなどをニュースで見ると、胸がつぶれそうになってしまいます。今すぐにでもボランティアに駆け付けたい気持ちになりますが、組織の中で動かないと余計に道路が渋滞したり、逆に食い口が増えて迷惑をかけたりといろんな障害が起こり大変だという話を聞くと、何もできない無力さを感じずにはられません。少しでも早く元の生活に戻ることが出来ますよう、ただただ、祈るばかりです。

1月2日には大きな事故もあり、今年のお正月は本当に心が痛むことばかりでした。急にやってくる災害に対し、日頃からの訓練の大切さを再度認識しました。先日は火事の避難訓練がありましたが、煙を吸わないよう、身体を低く保って避難している子どもたちを見て、より実践的だなあと感心しました。「命を守る」勉強、避難訓練はいつも真剣に子どもたちもがんばってやっています。

## 他国の「成人式」の記事を読んで

「毎日小学生新聞」の1月14日(日)の一面に、西アフリカにある「マリ共和国」出身の大学教授 ウスビ・サコさんの書かれた記事に「成人する意味」と書かれた見出しに、ふと目が引かれました。おりしも、1月9日に、日本では成人式が行われたばかりです。そこにはこんなことが書かれていました。

「マリ共和国」では、成人式とは、「自分の役割を担うための準備と通過儀礼を実施する行事」だそうです。つまり、年齢も大事ですが、自身の社会的役割を認識し、その役割を果たそうとする責任について考えるようになることが「成人」であり、その立場が務められるかどうか重要だとウスビ・サコさんは話しています。世界各国それぞれの考えで、成人年齢の定義や役割は異なりますが、「成人とは、自己認識と自己肯定ができ、社会の中で義務を果たす責任を持てる年齢である。」ということは共通しています。

それでは、日本で成人と呼ばれる「18歳」はどうでしょうか。ちゃんと社会の中で義務を果たす責任が持てているでしょうか。確かに頭では善悪の判断が付き、そろそろ将来について真剣に考えだす頃でしょう。しかし、日本の「成人の日」の意味合いとして、自分の役割と責任について考える日というよりも、華やかな着物を着せてもらってお祝いしてもらい、儀式を楽しむと言った気持ちの方が強いのではないかと思います。残念ながら20歳になった時の自分は、まだまだ子どもで、責任を果たすどころか、まだ見守られて学生生活を送っているような20歳でした。ちゃんと成人したとは言えてなかったのではないかと、今さらながら思ってしまう。

江戸時代のころまでは、「元服」と言って成人になる年齢が12、3歳のころもありました。元服したら、戦に出て戦わねばならず、一人前の大人として扱われていました。

時代が過ぎ、昭和初期のころを見ても、中学や高校の卒業と同時に働かれた方も多く、そ



の方たちにしてみると中学生のころから将来を見据えた人生設計を考えておられた方も多かったのではないかと思います。

そう考えると、そのころの18歳の若者と現代の18歳の若者にはずいぶん違いがあるような気がします。時代背景により、教育される「強み」が変化しているのも大きな要因の一つでしょう。

あくまでも私見ですが、現代の若い人たちの素晴らしいところは、物おじせず、自己主張がしっかりできる姿にあると思います。昔人間である私などは、いつまでたっても人前で話をするのがとても苦手で、たくさんの人の前に立つと、緊張し震えがきて上手に思いを伝えることができません。それに比べて、天見小学校の6年生は堂々としていて、中学校の新生体験会やズームで教えてくださった先生への挨拶を聞いていても、自分の言葉で思いをちゃんと伝えているのが素晴らしく、いつも感心させられます。自分の意見をしっかり伝えられるよう、現代教育の方針として培っているところですので、立派に人前で思いを伝えてくれている6年生を見ると、嬉しく感じます。こういう力が順調についていくと、私のように人前でドキドキもせず、自分の意見を頭の中でしっかりとまとめて、相手に思いを伝えることができる大人になるのでないかと頼もしく思うのです。

逆に、昭和初期の若者にも自分と比較してより優れていると思うことがたくさんあります。

例えば、我慢強さです。年老いた母の行動一つとってみても私よりずっと我慢強い。目標を果たせるまでがんばれる力だとか、最後までやり切る力などは昔の人の方が勝っていたのではないかと思います。

先日、「ブラタモリ」という番組で「黒部ダム」の風景が流れていました。黒部峡谷の景色のすばらしさを伝えるとともに黒部ダムという建造物をなぜ作らなければいけなかったか、その歴史にもスポットが当たった番組構成でした。人々の生活環境をよくするための黒部ダムをつくるのに、辛い環境の中でやり通した工事の映像が、印象的でした。トンネルの中での作業はとても寒く、その上、水が流れ落ちているのを浴びながら、常に凍死と事故と隣り合わせになりながら、この工事を遂行するのは至難の業だったと思います。自分だったら根を上げてしまうだろうと感じました。「どうしてこんな過酷な状況下で頑張れるのだろうか。」と思うのと同時に、自分の与えられた役割と責任を最後まで果たせるその頑張り我慢強さとに、尊敬の念を抱きます。

こうして見てみると、社会の役割はその時代時代で求められるものが変わり、期待される責任も変わります。少し欲張りな言い方をすれば、今、学習指導要領で大切にされている①思考力、判断力、表現力、②主体性、③協働的に学べる力というのはもちろん大切な力であることは間違いありませんが、昔の人に私が尊敬の念を感じた、自分の役割に対する責任感と継続できる力、これらの力も捨てがたい大切な力だと思います。

大人は、子どもたちへの期待として、成績や運動や社会性がこうあってほしいという願いが色々あると思いますが、目標をさらに未来におき、大人になった時にどんな大人になってもらいたいかを創造して試みるのが大切ではないかと思います。子どもたちが、役割や責任感を遂行できる力、自分の考えをしっかりと持ち伝えることができる力、周りの人たちと仲良く過ごせるコミュニケーション能力、それらをバランスよく習得できるよう手を貸したいものです。

子どもたちにはたくさんの夢があり、たくさんの目標があります。

その子らしい良さもあり、反対に不得手なところもあります。得手を伸ばし、不得手に関しても少しずつ頑張れる、そのことで達成感や自己肯定感が高まり自信につながるよう、我々は、それを支援できる大人の一人でありたいと思います。